

## 原著論文

## 社会危機において芸術はどのように語られてきたか

——コロナ禍のオランダの文化記事にみるエンパワメント機能と  
ディスカッション機能——

How has art been discussed in the COVID-19 pandemic?:

The empowerment and discussion functions in Dutch cultural articles

志村 聖子

キーワード メディア、芸術観、不要不急論、ジャーナリズム

## はじめに

2020年3月以降のコロナ禍で実演芸術は活動の休止を余儀なくされ、その影響は第一線のアーティストや文化関係者にとどまらず、音楽教師や生徒、愛好家、鑑賞者や関連業種等まで広く及んだ。人々が被った損失は経済的損失に限らず、得られたはずの経験の機会が失われたことも含めて精神的な損失も甚大であった。しかし、誰がどのような影響を受けたかの記録や考察は十分になされていないのが現状である。

本稿は、コロナ禍という特殊な状況下で、メディアにおいて「芸術」がどのように扱われ、語られてきたかに着目する。まず、日本における芸術文化活動に対する抑制がどのように生じてきたかを概観し、芸術に対する「不要不急」論の背景にある芸術への視点を明らかにする。その上で、海外の報道新聞（オランダの日刊新聞 *Trouw*）において芸術がどのように語られてきたかを調査し、これからの「芸術を語る方

法」の多様性を浮き彫りにする。

## 1. 「不要不急」論の背景にある芸術観

## (1) 芸術文化活動に対する制約根拠

これまでも社会が危機を迎えた際に国民生活が抑制され、それに伴って文化芸術活動が制約される事態は度々生じてきた〔資料1〕。その最たる例が、戦時中である。例えば「国民奢侈生活抑制方策要綱」は「聖戦下未曾有の時艱克服のため国民生活の自粛、贅沢禁止などを励行」し「質実剛健な国民の新生活を打ち建て」るための基準を明示したものである。そこで規制すべきものとして挙げられたのが「飲酒、享乐的飲食、遊興等」、「娯楽享楽」等であり、これらは「贅沢」、「奢侈」として抑制するとされた<sup>1)</sup>。石油危機の際には「『消費』が『節約』に美德の座をあっけなく引き渡すことになったとされ、このような危機の際に「もっとも圧迫されやすく、不要不急というレッテルをはられるのは芸術などである」との懸念が示されて

憲法	社会危機の種類	時期(年代)	芸術文化活動に対する制約・影響(主な事象)	制約根拠(法律および規則等)	制約の根拠目的
大日本帝国憲法	戦時中	第二次世界大戦下	・「娯楽享楽」の制限 ・表現物への検閲	・国家総動員法(1938年) ・価格等統制令(1939年) ・奢侈品等製造販売制限規則(1940年7月7日)	・「未曾有の時艱克服」、「贅沢禁止」、「質実剛健な国民の新生活を打ち建てる」 ・国民生活の全分野への統制権限を政府に授権。食物はもとより服飾・芸能への検閲の強化。
日本国憲法(1947年)	石油危機	オイルショック(1970年代)	・工芸品の生産に対する制約 ・不景気、財政難による劇団の解散など	・国民生活安定緊急措置法	・「消費は美德」から「節約は美德」へ ・省エネや節約ムードが高まり、レジャーは「不要不急」という声
	大喪	昭和天皇の容態急変から大喪に至るまでの期間	・歌舞音曲の停止など	法律の定めなし	
	金融危機	リーマンショック(2008年)	・企業メセナの削減による影響	法律の定めなし	・民間企業の財政難など
	大震災	東日本大震災(2011年)	・コンサート等のイベント自粛	法律の定めなし	「楽しいことをするのは不謹慎」 「節電」
	パンデミック	新型コロナウイルス感染症(2020年～)	・公立文化施設、民間施設の休館 ・コンサート等のイベント自粛	法律の定めなし	「三密防止」 「感染防止」

[資料 1] 社会危機における国民の芸術文化活動に対する制約 (筆者作成)

いる<sup>2)</sup>。例えば工芸品の制作が「窮屈」になったとされ、その誘因として、価格等統制令や奢侈品等製造販売制限規則によって「国民生活に必要欠くべからざる物品」だけの製造販売が許されたことを挙げ、範囲への疑念が示されている<sup>3)</sup>。大喪の礼の際には、昭和天皇の容態急変から大喪に至るまでの間において、歌舞音曲を伴う行事を控えるなどの広範囲な自粛現象が生じ<sup>4)</sup>、国や自治体などに対して「弔意を強制すべきでない」との見解も出された<sup>5)</sup>。大震災の際には、楽しいことをするのは「不謹慎」で、「お祭り」などのイベントが「自粛すべき」とされたが<sup>6)</sup>、自粛の理由として筆頭に挙げられたのが「節電すべき」(49%)であった<sup>7)</sup>。そして今回のコロナ・パンデミックである。「不要不急の外出」についての「自粛要請」が

出されたほか、政府によってイベントの中止または延期が要請されたが、方針や根拠は明確に示されなかった。自治体や設置者の判断によって公立文化施設が休館になり、実演団体は本番公演はもとより、日々の練習場所としての使用も不可能になったが、その法的根拠は曖昧なままであった。

## (2) 「不要不急」論のあいまいさとアーティストに「自問自答」を強いる社会

さらに、コロナ禍では「不要不急の外出自粛」が呼びかけられたものの、何が「不要不急」にあたるのかは自明ではなく、当初から曖昧であった。

そもそも、成熟化した社会では、本当の意味で不要不急の仕事は少ないとも言える<sup>8)</sup>。消費

者の嗜好が多様化した多品種少量生産体制の消費社会においては、供給者は製品を差異化することになるが、それはすなわち必ずしも必需品ではないが絶対に欲しいと思わせる必需品であることを要請することとなるからである<sup>9)</sup>。実際、政府自身も「不要不急」の内容を具体的に明示することはできなかった。首相答弁でも「不要不急」とは結局のところ「国民の皆様において、それぞれの生活状況等に応じて適切に判断いただくもの」とし<sup>10)</sup>、解釈が国民自らの判断に委ねられることが明らかとなった。

一方、文化の現場では萎縮効果が生じた。文化活動が明文で禁止されているわけではなくても、イベント等を開催する際に「何かあった場合にどう責任をとるのか」と言われると、主催者は躊躇せざるをえない。特に「コロナ初期」にあたる2020年3月にライブハウスでのクラスター発生がセンセーショナルに報道されたことより、音楽イベントに厳しい目が向けられたことも影響しているだろう。

このような状況下で、アーティストの中には、芸術は「不要不急」だというレッテルを社会から貼られたと受け止めた人も多かった。大阪アーツカウンシルが大阪の文化関係者に行ったアンケート等でも落胆の声が多々見られた<sup>11)</sup>。筆者自身も、コンサート会場で出演者が自らマイクを手にとって「音楽は『不要不急』と言われがちですが、…」と話す光景に何度も遭遇した<sup>12)</sup>。その先に続く言葉は、「私は、音楽が不要不急のものだとは決して思いません」、「日本の社会からみれば、音楽は不要不急とされるのかもしれませんが、気持ちが沈みがちな中で、音楽で少しでも明るい気持ちになってもらいたい…」など様々であったが、当事者として苦悩し、それぞれの思いや違和感を抱えていることが把握できた。

一方、メディアでは「不要不急」というフレーズと芸術活動を結びつけて問題提起する記事が目立った。例えば、日経新聞は2021年4月から全5回の特集記事を組んだが、シリーズのタイトルは「不要不急とよばれて」とされた。例えば、4月5日の記事では、「文化芸術に従事する人々は経済的に打撃を受けただけでなく、『我々は不要不急なのか』と自問自答を繰り返してきた」、「当局が『不要不急の外出自粛』を求めたとき、真っ先に中止・延期になったのが、文化芸術関係の事業だった」「『不要不急』という言葉が重くのしかかっている」などと紹介されている。アーティストや芸術監督の発言も「不要不急」と関連させて取り上げられた。例えば、宮城聰の「不要不急という言葉が流行ったとき、『劇場を閉じて誰も死なないが、コロナでは人が死ぬ』と言われた。…問題は、いかにして『演劇や劇場がないと死んでしまうひとがいる』ことを表現できるのかです」<sup>13)</sup>。また、音楽家へのインタビュー記事でも、例えば、西村由紀江はストリートピアノの演奏動画配信を控え、「音楽は、不要不急ではない大きな力を持っていると信じています。少しでも癒やしになったり、明日も頑張ろうと思えるお手伝いができると幸いです」と話し<sup>14)</sup>、鈴木雅明は音楽祭（「セイジ・オザワ松本フェスティバル」）への出演を控えたインタビューで「人間の不安や怒りにびたりと寄り添うべく存在するのが音楽。決して不要不急のものではない」と述べている<sup>15)</sup>。

### (3) 補償を伴わない「自粛要請」と自己責任論の限界

このように「不要不急」という言葉は曖昧さを抱えつつ、芸術の現場に「不愉快な」影響を与えてきたが、その背景にあるのは、活動制限

によって生じる損失に対する経済的補償やケアがほぼない状態に置かれたことへの疑問や不満だろう。特に海外各国が早い時期から芸術の重要性を明言し、芸術支援を打ち出したことが報道されると、日本の現状との差が浮き彫りになった。

例えば、2020年5月にドイツ連邦政府のモニカ・グリュッターズ文化・メディア大臣（当時）が出した声明は「芸術とは、人間の生存という根本的な問題に向かい合う上で不可欠なものであり、特に今のように、確実性が崩壊し、社会的基盤の脆さが露呈し始めている時代には欠くことができないものである」との内容であり<sup>16)</sup>、同時期になされたアンゲラ・メルケル首相（当時）のスピーチ<sup>17)</sup>も力強く、説得力があり、かかるメッセージを一国の首相が率先して明言したことは鮮明な印象を与えた。

文化政策の観点からの記事も出されたが<sup>18)</sup>、いずれも欧州における芸術文化への認識（公共性、社会的重要性）に比べて、日本ではこの点の議論が進んでおらず、社会的に共有もされていないことを浮き彫りにするものだった。特に、欧州では芸術文化が公共のものであり、教育や福祉、医療と同様に「『みんなのためのもの』は公的制度で支える考えが根づいている」ことや、「欧州では、主要団体への助成金は家賃や人件費に充てることができる一方、日本の文化振興策は事業費助成が中心で、家賃や人件費などの固定費には使えない<sup>19)</sup>」との旨の識者の指摘を紹介した記事がある。

提言を行った記事としては、2月27日の時点で、イベントの中止や延期に関する方針や補償について明確にすべきとの記事が出されているが<sup>20)</sup>、その後も現状は変わらず、第1回目の緊急事態宣言（4月7日発出）が出される直前（4月5日）の時点でも「担い手が立ち上がれ

なくなれば文化芸術の未来はありません。守るのは国の役割です。自粛の要請と補償はセットでなければならないことはいよいよ明白です」と指摘する記事<sup>21)</sup>が出されている。

一方、2020年9月、菅義偉首相（当時）の所信表明演説において「自助・共助・公助」が明言された。まずは個人の自助努力や自己責任、という考え方の背景にある新自由主義的イデオロギーが露呈したものといえ、各方面から異論が出された<sup>22)</sup>。日本国憲法25条の生存権を根拠とする反論として<sup>23)</sup>、「演劇や芸術といった“文化”は、その人間を支える背骨」、「（憲法の条文作成に尽力した鈴木義男は）『文化』なしには生存権は成り立たないと考えていた」、「生存権とは単なる動物的生存ではなく、人間に値する文化的生存」といった意見が紹介されている。

日本の文化行政における対応の遅さについては、支援が損失補填や給付金ではなく、「これから実施する事業への補助金」という事業補助の形式でなされることについても批判の対象となった。梶山正司文化庁参事官（当時）は「損失を補償しないのは政府の方針」であると断言し、「その線で支援を考えれば、事業ごとに補助金を出すしかない」とし<sup>24)</sup>、都倉俊一文化庁長官は、事業補助ではなく、活動する体力すらない人々への損失補填、給付金などを求める声が強いことについて「平時にあまり稼げていない人が給付金で突然稼げるのはまずい。文化芸術はやはり実力が基本」とした<sup>25)</sup>。これに対しては、「『文化芸術を創造し、享受することが人々の生まれながらの権利』という文化芸術基本法の理念が生かされていないのでは」、「芸術文化の実力があることと稼ぐこととは別なのではないか」、「稼ぎがある人だけで文化芸術は成り立っているでしょうか？小劇場や小さなライ

ブハウス [なども含め]、文化芸術は必ずしもそれを生業としている人だけで成り立っている訳ではありません」といった反論がなされた<sup>26)</sup>。

従来、我が国における芸術文化への助成や支援は制度として不十分であり、活動助成ではなく単年度の事業助成が多いこと、かつ赤字補填にとどまり、芸術組織が長期的なビジョンが描きづらいなどといった問題を抱えてきた。社会が抱えていた課題や矛盾がコロナによって顕在化したものといえる。メディアにおいても、日本の社会では芸術の役割や重要性をはじめ、芸

術支援や文化政策に関する基本的な理解がなされていないという実態が反映されたものといえる。

#### (4) 芸術文化活動の抑制による機会逸失を考える

コロナ下における「抑制」によって、何が失われたのだろうか。芸術文化活動が制約を受けたことの影響については十分に分析・考慮されてこなかった。例えば、アーティストの発表の機会が失われたこと、人が「集まること」が抑制され、施設も休館となる中、練習そのものが

##### 〈自律的な主体として〉

- ・舞台に立つことを念頭に、日々研鑽を図ったり、自己を律していく
- ・舞台において観客からの評価を受けるということ

##### 〈芸術への寄与〉

- ・舞台に立ち続けることで芸を磨き、芸能を継承し、後継者を育成する

##### 〈交流による刺激〉

- ・多様な人々と関わり合う中で、多様な考えや価値観に接し、新しい創造への刺激を受け、自己変革を図る機会
- ・外部で刺激を受ける機会

##### 〈情報の受け手として〉

- ・外部で多様な情報に接し、知的な想像力を育むということ
- ・ある場所で過ごすことで（寺院、図書館、劇場空間など）人が思索し、考えるための拠り所となるということ
- ・受け手の鑑賞機会。特に子どもなど弱い立場におかれがちな人々の鑑賞・参加の機会
- ・芸術による内面への挑戦を受け、「受け手の自己変革をもたらす」ような機会を得ること

##### 〈集まること〉

- ・プロアマ問わず、共通の場に集まり、何かが新たに生み出されるということ

##### 〈意識、やる気〉

- ・様々な公演が中止・延期となる中で、演奏家だけでなく鑑賞者も「意欲の減退」を訴える傾向がみられる

##### 〈社交機能〉

- ・かつて劇場は、舞台鑑賞の場であるとともに、人々が集い、社会関係を構築する社交の場でもあったが、コロナ禍の劇場やホールでは客席での会話やホワイエでの飲食、交流が著しく制限され、社交の場としての機能が減損した

##### 〈地域、社会への影響〉

- ・各地の盆踊りや祭などができなくなることで後継者が育つ機会が失われ、地域の文化が存続できなくなる。結果的に全国の多様性が失われるという影響

##### 〈教育普及活動への影響〉

- ・子どもを対象としたワークショップや学校でのアウトリーチの中止・延期や規模縮小による子ども等の体験の機会

しにくくなったこと、先の状況が見通せず、生活に不安を抱える中での意欲の減退などは、調査結果からも明らかである<sup>27)</sup>。一つの場所に集まり、同じ時間・空間を共有するという舞台芸術活動が維持できなくなる中で、聴衆とのコミュニケーションも変質した。オンライン活用の可能性も模索され、新しい取り組みもなされたが、オンライン配信は生の舞台公演とは「別物」であるとの意見は現場からも多数示された<sup>28)</sup>。

一方、芸術活動が、直接に活動に関わる人だけでなく周囲にも影響を与える活動であり<sup>29)</sup> [芸術文化の生の外部性]、人格的生存、自らを律し、高める機会といった精神的な活動であったことも考えると、活動抑制による影響は上記に留まらない [資料 2]。

芸術文化活動の抑制によって負の影響を受けたのは、発表の場を機会を失ったり、得られるはずの収入を損失したりしたプロのアーティストに限られないはずであるが、このような様々な不利益や機会の損失については必ずしも議論が深まってこなかった。コロナ禍においては、これまでの文化芸術活動が包摂しようとしてきた多様な送り手、受け手の存在や現状が見えにくくなり、地域における多様な芸術環境が守られているのかどうかの懸念も生じた<sup>30)</sup>。このように、事業者への経済補償だけでは解決できない課題も横たわっている。

## 2. メディアの役割と可能性

### (1) 情報の質の担保

メディアの質や内容の多様性をどのように担保するかについては重要な社会課題である。コロナ禍で生活が危機に瀕する中、正確で信頼できる情報の価値が明らかとなった<sup>31)</sup>。

情報パンデミックの拡散力と脅威についてはコロナ禍当初から警鐘が鳴らされてきた<sup>32)</sup>。そもそも、ニュースへの信頼は世界的に低下傾向にあった。世界の比較調査によると、ニュースメディアの役割を「何が起きているかを知らせてくれる」と評価する人は平均して 62%、「事象を理解する助けとなる」51%、「権力を持つ人やビジネスを監視している」は 42% いるが、日本では「権力の監視」として評価する人は 17% しかおらず、これは世界でも最低であるという<sup>33)</sup>。また、検索サイトが提供するアルゴリズムにより、人々が自分の興味のある情報にのみ接する傾向が強まり、多様な価値観や視点が行き交う「思想の自由市場」の前提が失われるとの懸念が示されている<sup>34)</sup>。

そもそも、思想・意見の自由な伝達は、人のもっとも貴重な権利であり（フランス人権宣言第 11 条）、遠く離れた個人間の間接的な対話の伝達を担うのがメディアである<sup>35)</sup>。情報が高度化する現代社会においては、マス・メディアは、民主主義の情報インフラストラクチャーの役割を果たしてきている<sup>36)</sup>。パンデミックのような未曾有の事態においては、他者に生じている出来事を知り、事象を理解することが（自分が置かれた状況を理解するためにも）欠かせない。そのためには、「切実な情報を身近に感じる経験」の必要性があることが示されている<sup>37)</sup>。人々の精神的な充足への需要を喚起するためにも知的な刺激であり、信頼できる質の高い情報が循環しているという状況を作り出すことが民主的社会の形成にとっても望ましいはずである。

このような問題意識を鑑みて、次に、海外のメディアではコロナ禍において芸術をどのように取り上げてきたのかに着目する。

## (2) 調査の対象と方法

本稿で調査対象とするのは、オランダの日刊新聞 *Trouw* のデジタル版である。

最新のデータによるとオランダの人口は1778万人<sup>38)</sup>、オランダの全国紙は2021年時点で8種類あるが、オランダにおけるメディアへの信頼は世界で第4位と高く<sup>39)</sup>、コロナ禍でも伝統的なメディアへの信頼が高まっている<sup>40)</sup>。一方、デジタル新聞の購入割合も17%であり、世界各国でも高い比率である<sup>41)</sup>。

オランダにおける新聞の創刊年をみると、もっとも古い *De Telegraaf* (1618年以前)、経済専門紙の *Het Financieele Dagblad* (1796年) などがあるが、これは、早くからアムステルダムがヨーロッパにおける印刷の中心地であり、言論の自由も認められてきたという土地柄を反映しているものと考えられる。今回の調査対象として取りあげる *Trouw* は1943年創刊で、オランダでは比較的新しい新聞である。

*Trouw* は、1943年、第二次大戦のナチス占領下において、ドイツ占領軍に対するプロテスタントのレジスタンスの非合法新聞として創刊された<sup>42)</sup>。当時の新聞は紙不足、そして言論弾圧により、出版するのも配達するのも命がけであった。創刊時の関係者も投獄されたり処刑されたりしたという歴史を経験している<sup>43)</sup>。戦後になって日刊紙となり、読者層をプロテスタント信者に限らず、「すべての人にとって熟考とインスピレーションのもととなることを意図」するようにと理念が変わった<sup>44)</sup>。

現在の編集長は *Cees van der Laan* 氏である。編集長からのメッセージとして、*Trouw* の読者は「社会と関係する」という感覚を得られる、ということや「今の新聞は、単なる毎日の振り返りではなく、多くの研究を行っている」「権力をコントロールするためにも、私たち新聞は

重要な役目を担っている」ということが打ち出されている<sup>45)</sup>。

発行は月曜から土曜日までで、日曜日は発行されない。紙面がもっとも充実するのは土曜日で、本体のほか、2つの特集冊子が発行される。値段は、紙媒体では1部あたり€3,25(月-金)、€4,25(土曜)、デジタル版では月€19,99(2,948円、€1=147.51円と換算)である。目的やライフスタイルに応じて、様々なサブスクリプションが提供されている。

調査対象の時期については、コロナ禍の拡大の影響を受けてオランダ政府の動きが顕在化した2020年3月12日を起算日とし、12月末までの記事を分析対象とした。

方法は、デジタル版の検索機能を使用し、検索ワードとして *podium kunst(en)* [舞台芸術]、*theater* [劇場]、*opera* [オペラ]、*muziek* [音楽] を設定し、ヒットした500超の記事から、オランダの文化シーンにはほぼ関わらないものを省いた373の記事を対象とした。

## (3) 結果

まず、記事の種類についてみると、様々な形態の記事があることが分かる [表1]。いずれも署名記事であり、執筆者が明確である点が特徴であるといえる。次に、記事で取りあげられたジャンルについて分類すると、実演芸術に関連する幅広いジャンルや個別の分野が取りあげられている [表2]。

記事の執筆者(ジャーナリスト)と、担当や専門分野については表の通りである [表3]。

次に、内容について見ていくことにする。記事が扱うテーマや内容を、その記事が一番主眼としていることに着目して分類していったところ、大きく6種類に分類することができた [表4]。

表1 芸術に関する記事の種類

<ul style="list-style-type: none"> <li>・政府発表に関する記事</li> <li>・取材記事</li> <li>・ルポルタージュ (特定のテーマに関する現場取材・調査)</li> <li>・調査報道 (データ分析等)</li> <li>・定期コラム</li> <li>・インタビュー</li> <li>・追悼記事</li> <li>・レビュー (舞台公演、CD ほか)</li> <li>・オピニオン (寄稿)</li> <li>・その他</li> </ul>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

表2 記事で取り上げられた芸術のジャンル

<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラシック</li> <li>・ポップス</li> <li>・ジャズ</li> <li>・民俗音楽</li> <li>・オペラ</li> <li>・バレエ</li> <li>・モダンダンス</li> <li>・演劇</li> <li>・ミュージカル</li> <li>・カブレット (寸劇、風刺劇)</li> <li>・コメディ</li> <li>・ショー (アクロバットほか)</li> <li>・サブカルチャー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・野外パフォーマンス</li> <li>・フェスティバル</li> <li>・ポッドキャスト</li> <li>・映画</li> <li>・文学</li> <li>・ミュージアム</li> </ul>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

表3 芸術記事の執筆者 (ジャーナリスト) と専門分野、役割

Peter van der Lint	クラシック音楽、コラム担当
Joke de Wolf	美術専門家
Sander Becker	科学ジャーナリスト、音楽評論
Sandra Kooke	芸術部門の編集者
Frederike Berntsen	クラシック音楽
Frank Hettinga	音楽、スポーツ
Seije Slager	オランダ国外担当エディター
Abdelkader Benali	作家、TV プレゼンター
Isabel Baneke	エディター
Hans Nauta	経済、芸術
Anita Twaalfhoven	演劇、ダンス、実演芸術
Belinda van de Graaf	映画
Nienke Schipper	マルチメディア
Iris Pronk	「文化とメディア」校閲
Rufus Kain	文化人類学者、ミュージシャン
Saskia Bosch	ポップス
Harmen van Dijk	ビジュアルアート
Alexander Hiskemuller	バレエ、ダンス
Stevio Akkerman	コラム担当 (毎週3回)
Mischa Andriessen	ジャズ

表4 芸術に関する記事で取り上げられた主要なテーマの分類と内訳 (全 373 記事)

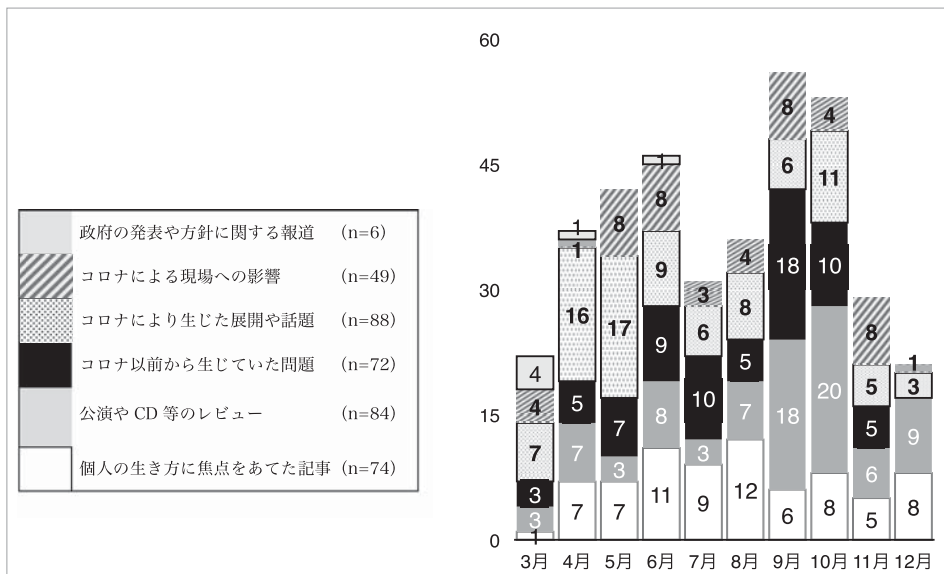




表5 政府の発表や方針に関する報道（抜粋）

日付	執筆者	記事のタイトルと主な内容（概略）
3月12日	Redactie (編集部)	「内閣：咳が出るなら家にいて。大規模な集まりは中止して」政府のコロナ対策の発表（悪寒、咳、喉の伊丹、発熱などがある場合は自宅にいること、100人以上の集まりは中止すること）及びそれに伴う現場への影響について、関係者へのインタビュー
3月13日	Redactie (編集部)	「コロナの影響で学校の教室は空になり、遊園地はドアを閉じる」コロナ規制によるイベント、ホテル、学校、遊園地等への影響について。軽度の症状でも学校に通えない子どもが出現している問題や、ホスピタリティ部門や文化部門が予約キャンセルによる打撃など
3月15日	Redactie (編集部)	「1日で8名のオランダ人がコロナウイルスで死亡」コロナの影響に対する首相や財務大臣の対応。KLM やスキポール空港への救済など経済措置について。ショッピング、レストラン、ケータリング、旅行業界も業績悪化していることについての取材
3月16日	Redactie (編集部)	「EU 経済圏がコロナ対策に10億ドルを注入、国境閉鎖」コロナに対する各国の対応（国境封鎖、警官配置、経済策）等、各国リーダーの判断に関する報道
4月15日	Jeannine Julen	「ヴァンエンゲルスホーフェン文化大臣が文化部門に新たな手を差し伸べる：3億ユーロ増額」内閣は文化機関をコロナ危機から脱却させることを望み、3億ユーロの緊急パッケージを決定したが、文化大臣はこれが特に芸術部門という「特定のセクター」を対象とした支援であることを強調している。記事は「芸術部門が満足しているかどうかは不明」とし、継続性などに厳しい見方を示す
6月24日	Charlot Verlouw	「コロナ規制は緩和されつつあるが、1.5メートルは神聖なまま」コロナ規制は7月1日から緩和されるが、第2波が予測されるため、一定のルールは残る。例えば、1.5mの距離を確保できるイベントでは屋内での人数制限は撤廃される一方、屋外では全員が距離を保って着席できる場合のみ250人以上の集客を可能とするなど。これにより、交通公共機関や旅行への影響のほか、ナイトクラブ、合唱団の練習、教会の礼拝（讃美歌）、スタジアムでの応援などが受ける影響について論じる

以下では、それぞれのグループについて具体的に見ていく。

①政府の発表や方針に関する報道

まず、最初のグループは、政府の発表を取りあげる記事群である [表5]。オランダでは3月に入ってコロナの感染が拡大し、3月12日に政府により「100人以上が集まることを禁止、同じ施設に留まることも禁止」という方針が出され、全てのセクターが影響を受け、劇場や美術館も突如休館となった。記事では国立美術館や劇場、フェスティバルの責任者などの反応が率直に示され、例えば「3月に予定されていた行事が中止になり、打撃は大きい、政府の方針は理解できる」といった声の実名で報道されている。このグループの記事は数は少ないものの、政府発表を報道する際に、その方針の背景や新たな規制を文化にあてはめた場合に何が起きるのか、そして生じうる影響を扱っている。また、影響を受けるであろう人の声が具体的に紹介されている。政府の単なる発表や広報

記事はなく、現場取材や背景の分析、あるいは解釈を導き出す作業をジャーナリストが行っていることが分かる。

②コロナや政府方針による芸術の現場への影響に関する記事

次は、コロナや政府の方針によって、アートの世界にどのような影響が生じているかを取り上げた記事群である [表6]。「支援について」「各ジャンルの中止や再開」「劇場やホールの感染防止対策や混乱ぶり」「経済・雇用問題（損失額や、失業者の数）」「ワーカーの様子（アーティストの頑張る様子）（苦境についての調査分析やルポ）」「国民の消費動向（劇場が再開しても客足が戻らない、国民の意識調査の分析など）」などが取り上げられている。具体的な数字や当事者の声をもとに現場の状況を克明に記したり、分析されており、ジャーナリストが言わば「アナリスト」としての役割を担っていることが分かる。

表6 コロナや政府方針による芸術の現場への影響に関する記事（抜粋）

日付	執筆者	記事のタイトルと主な内容（概略）
3月13日	Redactie (編集部)	「オランダのアート界は封鎖される。私たちはただ頭を抱えて泣いている」100人以上が集まるイベントはキャンセルすることになり、国立美術館や国立劇場は休館する。現場の声を伝えるルポルタージュ
3月14日	Peter van der Lint	「どのようにしてホールから音楽が消えたのか」週間コラム。受難曲などで活発化するシーズンに音楽界が激変し、公演中止や報酬が支払われないことによる影響と緊急基金の必要性について述べている。今後予定されている様々な公演への影響を案じている
3月15日	Sandra Kooke	「コロナウイルスはアーティストに経済的問題を引き起こしている」コロナによるフリーランスのアーティストや自営業者に対する経済的影響。3月のシーズンに年収の半分を稼ぐ音楽家もいるなど、突然のキャンセルに苦しむ現場の実態を詳細に明らかにしている。インタビューをもとにした調査報道。国による緊急の芸術支援について、「このようなリスクをビジネス上甘受すべきとは考えられていないことについて喜んでいる」
3月17日	Abdelkader Benali	「疫病の波の間にシェイクスピアが書いたソネットの慰め」コラム。3月に予定されていた「ハムレット」公演が中止となったことを契機に、公演準備に関わってきた当事者にインタビューを行い、シェイクスピアのソネットの美しさと1500年代の疫病蔓延について記している
4月16日	Iris Pronk, Nienke Schipper	「病んでいる文化のための援助資金は『前進の第一歩』」文化部門のための3億ユーロの緊急援助に対する現場の受け止めについて。国のスキームから漏れるフリーのプロデューサーや企業家に支援がなされないことについて、具体例を取り上げ、当事者の声を取材している
5月7日	Sander Becker	「舞台業界が警告：3館に1館の劇場が夏前に倒産する」劇場（舞台芸術）を巡る厳しい状況を報じ、国や自治体の支援を求めている
5月8日	Rufus Kain	「ホールに30人、それでは採算はとれない」文化部門の存続は危機に瀕している。少数の客席で劇場を再開できたとしても経費がかかりすぎる。そのコストをどこに転嫁できるのか？という観点から、コンサートへボウやハーグ国立劇場、各地のディレクター等に取材し、再開への見通しやコストについて考察
5月9日	Peter van der Lint	「悲惨な結果を招いたパッション」アムステルダム混声合唱団は3月8日、コンサートへボウでバッハのヨハネ受難曲を演奏。5日後、全てのコンサートホールが閉鎖されたが、合唱団にとっては間に合わず、4名の死者、100名以上の感染者を出した。コロナ感染が拡大した経緯等についての取材と分析
5月23日	Sandra Kooke, Iris Pronk	「半分空っぽのホールでも、全てを捧げる：『空席がすぐに見える』」6月1日からは劇場がコンサートホールが再開されるが「30人」という規制がかけられることへのアーティストの葛藤について。コメディ俳優 Guido Weijers (42) が「観客は私たちの酸素です」などと話し、空席が目立つ劇場でコメディを行うことの難しさを語っている。「人は、一人の時よりもグループでいる方が笑う傾向があります」。バイオリニスト Liza Ferschtman (41) は、完全に沈黙と空の沈黙があるとし、「空の沈黙では何も起こりませんが、集中した聴衆とのコンサート中に発生する完全な沈黙では、エネルギーがホールを泡立たせます。そしてそれがライブコンサートを特別なものに行っているのです。オーディエンスはあなたの演奏をより高いレベルに引き上げます。最も美しいことは、注意深い沈黙の中で起こります」
5月26日	Rufus Kain	「文化部門は『デジタル・マリーフェルド』を求めている」国の芸術支援が不十分であり、3億ユーロの助成は偏りがあることを主張するため、文化部門の多様な当事者がライブストリーミングで1週間のデモを行うことを報じる（訳註：マリーフェルドは、デン・ハーグでデモ会場として頻繁に使われる場所）
5月29日	Anne ter Rele	「道徳的責任：キャンセルされた催しの払戻を請求しますか？それともバウチャーを受け取りますか？あなたには選択肢がある」多くの芸術組織が、公演中止となった場合に払戻ではなく、バウチャーを受け入れるように顧客に呼びかけているが、「消費者として、あなたはその呼びかけに応じるべきですか？」という問いかけを行なっている。消費者協会のスポークスパーソンや消費者行動論の教授、マーケティング専門家などに取材し、様々な場合を想定して細やかに論じている。一つのケースとして、「あなたが仕事を失ったのであれば、連帯を示す余地はありません。いつでも返金を請求できます」としている

### ③コロナによって芸術界において生じた話題や論点を取り上げた記事

次の記事群は、コロナによって新たに生じた話題やコロナをきっかけに生じた論点を中心とする記事群で〔表7〕、オンライン公演、対面での公演や練習、コロナ禍における新しい演出、公演を新たな形で再開、メンタルの健康とアート、家や屋外での過ごし方などに分けられる。10代のアーティスト志望者が、ロックダウン中に何を考え、作品を生み出しているのかを写真とともに紹介する記事や、アーティストの生き方など、事例や対象は多様である。特に

子どもや学生、若いアーティストへの視点が顕著である。

### ④コロナに関わらず、芸術界で問題とされてきたテーマに関する記事

以上の3種類の記事群はコロナが関係する記事であったが、次の記事群はコロナに関わらず、これまで問題になってきたテーマが扱われているものである〔表8〕。

例えば、「#Me too」に関しては、①劇団におけるハラスメント防止のためのガイドラインの策定がなされ、これがファンや一般に公開され

表7 コロナによって芸術界において生じた話題や論点を取り上げる記事（抜粋）

日付	執筆者	記事のタイトルと主な内容（概略）
3月17日	Isabel Bencke, Jette Pellemans	「育児支援のない時期をどう乗り切るか、7つの秘訣を紹介します」コロナ禍において、家での子ども達との時間を「ゲームや YouTubeにはまらずに」想像力と創造性をもって過ごせるヒント集。演劇教師がVintマイムなどの演劇のレッスン動画を毎日10分間アップロードする事例の紹介や、訪問が制限される祖父母に手紙を書くこと、歌やダンス、スポーツのオンラインレッスン、ミュージアムのオンラインコレクションを活用した作品づくりなど
3月21日	Anita Twaalfhoven	「ロッテルダムの演劇集団 MAAS は、家にいるファミリーのために活動します」様々な集団がオンラインでクリエイティブな活動を開始している中で、家にいながら家族全員が参加できるオンラインワークショップの提供について紹介。「何もしないコース」や「演劇について書くコース」などがある。フラメンコのワークショップでは、さまざまな拍手のテクニックを学ぶ。「アイデアに満ちたあなた自身の頭は十分すぎるほどで、あなたの想像力はあなたをどこにでも連れていく」
3月22日	Peter van der Lint	「夏にはマイイ受難曲が聴けるだろうか」コラム。3月からの音楽コンサートが軒並み中止となり、今後の予定が空白になった。5月以降や夏に予定されているフェスティバルやオペラのプレミア、コンクール等についての見通しを取材
3月29日	Peter van der Lint	「ヘッドホンでオペラを聴く、まさに世界初演」コラム。オランダ国立劇場にてオペラ「リトレット」がオンライン世界初演された。作曲家 Willem Jeths はプッチーニやトスティ、ワーグナーの引用を散りばめながら「生きた芸術作品を完成」させ、演出やセット、衣装、そして歌手陣も素晴らしい成功したことを説明している。「本物の初演」(生公演)を望む、と締め括られている
4月8日	Martijn van de Griendt	「写真家の Martijn van de Griendt が、家で孤立した若者たちを訪ねる：私の世界は陳腐だ」Martijn van de Griendt は、若者を専門とする写真家で、コロナ危機の際に自宅隔離中の多くの若者を訪問し、彼らに欲求不満と感情的な混乱を言葉にするように依頼した。作家になりたという夢があり、毎日書き物をしている Milou (16) や、ミュージシャンを志望し、曲の歌詞を書いている Duuk (17) など、写真とともにティーンエイジャーの芸術活動や思い、苦悩を紹介している
4月10日	Joost van Velzen, Robin Goudsmit	「これから1.5メートルの経済はどのようになるだろうか?」「ゆっくりと通常の状況に戻っていく」あるいは「1.5mの距離を保つ必要は今年後も続く」という見方のもとで、レストラン、キャンプ場、歯医者などに続いて、劇場や実演芸術がどのような影響を受けるかについて見通しが述べられている。「一緒に良いコンサートを体験するという集合的な陶酔感、0と1に変換するのは難しい」
4月21日	Sandra Kooke	「椅子やカウンターをバーにして、自宅でパレエをする」パレエダンサーは、スタジオが閉鎖され、公演がない時間をどう過ごしているのか。毎朝のトレーニングやリハーサルの方法などを様々なダンサーに取材。国立パレエ団は家で練習用の床やバーをダンサーに届けたが、そのような恩恵を受けられない小団体のダンサーもいる。「今、聴衆がいなくても練習するのはいいです」「私たちはアーティストです。私たちがしていることを共有したいと思っています」という声を紹介されている。集合住宅地（屋外）で「白鳥の湖」を踊り、住民を楽しませる例も
4月27日	Veerle Spronck	「文化的な観客を忘れてしまう危険性」文化についてのオピニオン記事。国は、「活力のある」文化機関のために支援を行い当面は、基本的な文化的インフラストラクチャの経済的損害を抑えようとしているが、文化愛好家の存在を忘れてはいけません、と訴えている。文化的参加は直接的な経済的損失についてはありません。代わりに、経験、伝染性の喜び、そして一緒に遊んだり、聞いた、見たりすることを学ぶプロセスが失われます。これらの学習プロセスにもっと注意を払う必要があります。私たちの社会が半分待ち望んでいる5フィートの中で、アートが私たちの日常生活の一部になる方法を一緒に学ばなければなりません」
5月4日	Sander Becker	「完全にバーチャル化された合唱団」作曲家・歌手・指揮者の Jeroen Spitteler が、合唱作品「Origins」を完成させた（3月11日）後にコロナ規制がかかり、個別練習やリハーサルから本番までを全てバーチャルで行った。各声部の練習方法を説明したビデオの準備や指示の内容、各メンバーの録音方法まで、どのように困難を乗り越えてきたかが詳細に説明されている
5月4日	Robin Goudsmit	「どうすれば家で自由を祝うことができますか?」5月5日の「自由の日」(ナチスドイツから解放されたことを祝う解放記念日)を、今年は集まって祝うことができない。NOS (公共放送) が、カレ劇場から特別な音楽公演を行うことや、午後4時55分に曲「歌う、戦う、泣く、折る、笑う、働く、賞賛する」を共に歌うことを呼びかけていること等を挙げ、TV やインターネットで音楽イベントを楽しむことを紹介している。
5月5日	Anne ter Rele	「解放の日」のパーティをラップアップで祝う：ライブストリームパーティーの数は増え続けている」コロナ規制により集会が禁止されて以来、パーティーのライブストリームの数が着実に増加している。このようなホームパーティーでは、アーティストがライブ音楽を作成し、ラップアップやテレビで直接聴くことができます。ただし、このような体験は共有されたクラブ体験とは異なり、「あなたのリビングルームでの体験は、大規模なフェスティバル会場での体験と同じではない」しかし、これを体験するのは楽しい」という当事者の声を紹介されている
5月8日	[TV と連動したコラム]	「コロナの時期に「笑い」は許されるか?それは間違った質問だ」コロナ禍で休業を強いられるコメディアンに意見を聞いている。あるコメディアンは、「ユーモアにはリズムが必要」で、それは「アーティストと観客の間を行き来する対話」であり、オンラインではそのような対話が成立しにくい、と話す。「私たちの聴衆にとって、真空（空席）は私たちが理解できる以上のものを意味します。楽しさ、視点、音楽、ドラマ、美しさを通して私たちがインスピレーションを求めているとき、私たちはそれを一緒にライブで体験することはできません。衆議院が休会中に政治ニュースが沈静化するのと同じように、パロディや風刺の流れは今や部分的に枯渇しつつあり、テレビやインターネットにはまだ何かがありますが、聴衆の暖かさが不足しています。」人々はパロディや風刺を必要としており、ユーモア、人々の温かさとも必要不可欠であると述べる
5月9日	[意見記事]	「コロナ危機に関する意見調査の分析」2021年5月の選挙を前に、これまでのコロナ危機への対応についての評価を行うため、ライデン大学とエドレイト大学の研究者の分析を紹介している。コロナ危機の評価は、非難ではなく真実を見つけることであり、次のパンデミックに備えて今回のことから教訓を得るべき、としている。真実を見つけるための出発点は「ケア提供者、専門家、管理者が最善を尽くしたこと」であるとし、この巨大な危機から学ぶには、他の国々の反応や以前のパンデミックの間の比較が必要であるとともに「この前例のない大惨事の集合的な記憶を構築することも同様に重要」であり、さらに「行政や外部の専門家の声に加えて、患者から生き残った人、医師、ソーシャルワーカー、起業家、公務員、教師、研究者、その他の利害関係者の声を聞く必要がある」とする。
5月10日	Maaike van Houten, Bas Roetman, Marije van Beek	「1.5mの礼拝の場：もうすぐ中に入れるのは誰でしょうか」宗教施設（教会、モスク）を取り巻く困惑について。7月1日から、30人最大100人までであれば1.5mの距離確保で緩和されるが、対応のあり方を各宗派に取材。キリスト教教会にとって会衆が歌うことは重要な問題であるが、ルッテ首相は、大規模な教会もやはり最大100人という規制に従うべきことを明言した。歌うことのリスク、そして教会が「汚染源」になることを避けるためである。「天井が低く、高齢者ばかりの教会で大声で歌うこと、それは許されることで、それが賢明かどうかは自問自答しなければなりません」「夏になると屋外に出る機会もある。広場での合唱や、屋外での礼拝も検討しては」という教会関係者の声を紹介されている
5月22日	Rufus Kain	「アーティストが好むオンラインコンサートのアイデア：新しい可能性が開ける」ポッドキャストにおいては、コロナ禍でオンラインコンサート、オンラインチケット販売、ストリーミング配信などが急速に進み、「デジタルポップコンサートは急速にプロフェッショナルになりつつあり、アーティストもチケット販売を始めていく」ことが紹介されている。ファンとの対話についても、「事实上、音楽を通して話ることができます。そして、これはあなた自身の家から可能です」と好意的な声を紹介している。また、音質や画質の良さを求めて機材に投資する例も紹介されている
5月25日	Friederike Berntsen	「ライブストリームコンサート：コンサートホールは閉鎖されているが、これらの12のコロナ作品はまもなく初公開される」[Music for Empty Spaces] は、12人の演奏家が演奏する12人の作曲家による12作品の世界初演で、5月28日午後8時に Muziekgebouw aan 't U GroteZaal からライブ配信される。このプロジェクトに参加した作曲家や演奏家への取材記事。作曲家のビジュアルは、「仕事を続けるには目標が必要です。日々の目標や収入がないことは心理的に悲惨です。あなたが音楽を作るとき、あなたはその音楽を人に聞かせるのだから」と語る。「ホールが閉鎖されている間、ストリーミングは聴衆に到達するための解決策です」「聴衆とのインタラクション、温かさ、顔の表情が恋しいですが、できるだけ聴衆を想像しようとしています」。頭の中は想像上のリスナーがいます
6月12日	Peter Henk Steenhuis	「ボーイングに300人?1.5mの社会にとって、道徳的基盤は今や破壊されている」コロナで発生した新たな倫理的問題を取り上げるシリーズ。「劇場やレストランには30人しか入れないのに、飛行機には300人を詰め込めるのは何故か?」「KLM やスキポールが他のセクターに比べて特種的なのはおかしいのではないか?」を問う。航空会社が規制との後退措置を受け、地球温暖化に負の影響をもたらす上、オランダ人で飛行機を利用する人は8% (2016年)で、恩恵を受ける人は社会のごく僅かな特権階級にあたる人であり、例外的な救済措置が道徳的に正当化できないことを論じている

表 8 コロナに関わらず、芸術界で問題とされてきたトピックについての記事

<p>#Me Too          芸術作品における女性の描かれ方          女性（指揮者、アーティスト、女性監督）          コン서트ヘボウ・オーケストラの指揮者問題          女性の古い（白髪）と美しさ  <b>BLM</b>、黒人の権利保障          レイシズム、反差別運動          奴隷制廃止          黒人作曲家の作品を解釈する  <b>Gaper, Black heritage</b>、          絵画における黒人モデルの描かれ方          植民地とミュージアム          ミュージアムと盗品返却問題          芸術と自由、歴史、戦争、抑圧、          アウシュビッツ          ヨーロッパの連帯          難民問題          イスラム問題          （フランスでの教師殺害事件を受けて）          アーティストへの適正な報酬、支払          芸術と政治、民主主義、市民          芸術と政治、女性</p>	<p>自治体における文化施設          自治体宗教遺産（教会）          地域経済（観光の発展から取り残されている          地域、合併で消えた町）          サステナビリティ          サステナビリティと気候変動          人間のファンタジー（性）と芸術作品          オンライン化と教育の問題（学生の育成への危惧。          「人間性の貧困を招く」）          芸術は誰が支えるべきか、制度論          文化（を享受すること）は人権である          ユースオーケストラへの助成について          飛行機事故（MH 17 災害）を取りあげた舞台作品  <b>LGBTI</b>（レズビアン・カップルを主人公とする作品など）          ミュージアムのあり方（コレクションが重要、          館内でのセルフイーを許すべき）          障害をもって生きる          ユーモアのダークサイド          子どもと自由          アーティストの生き方（「起業家精神、職人気質が必要」）          SNS との接し方とアート</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

るまでの経緯や、②コンサートヘボウオーケストラの常任指揮者がハラスメント問題で退任してから新しい指揮者が決まっていない問題、③女性が制作に携わった作品、④舞台作品における女性の描かれ方や、女性の「古い」と「美しさ」について、などがある。

また、「BLM」に関連しては、「多様性」とも関わって、①オペラや演劇における黒人のタイトルロールについて、②レイシズムの問題、③難民であることを語る、④LGBT コミュニティへのインスピレーションなど、多様な記事がある。

様々な社会問題や組織の動きと関連して、芸術の世界にも問題があることや、その中でも変化しつつあることを捉えようとしていることが記事を通して把握できる。また、読者の側にも「自分はこれについてどう考えるのか、どういう意見をもつべきだろうか」と考える機会をひらいたり、問題意識をもつきっかけを呈示しているといえる。

#### ⑤舞台公演や作品のレビュー

次の記事群は、公演や作品のレビューである[表9]。音楽 CD が定期的に取りあげられているほか、新しいジャンルとしてポッドキャストもレビューの対象とされている。舞台公演が減少した期間ではあったが、オペラは7回取り上げられており、例えば「さまよえるオランダ人」の新しい演出がコロナ禍で大成功を収めたこと、またオランダの若手ホープのピアニストが数ヶ月ぶりに活動を開始したことなどが紹介されている。それぞれの評価は文章のほか、5点満点（★の数）で示されており、4点のものが多く傾向があるが、これは一般新聞においては好意的な評価の方が積極的に記事にしやすいという面もあるのだろう。公開される時期に着目すると、フェスティバルやコンサートシリーズなど、一定の会期がある公演の場合は事前に記事にし、読者が実際に鑑賞できる機会を得られるようにする配慮が見られる。これは実演芸術の活性化にとって大事であるばかりでなく、レビュアーと同じ公演を鑑賞して評価を比

表9 公演や作品のレビュー記事におけるジャンルや種類 (○は取り上げられた回数)

エラスムス賞 (音楽)	○	ミュージカル	○○○○
ベートーヴェン・シリーズ	○○○○○○	演劇、シアター	○○○○○○○○○○
コンサート	○○○○○○○		○○○
マタイ受難曲 (クイズ)	○	ユースシアター	○○
ピアノトリオ	○	コメディ	○
オペラ	○○○○○○○	ソロパフォーマンス	○
指揮者	○○	映画	○○
CD (ジャズ1含む)	○○○○○○○○○○	ポッドキャスト	○
	○	お出かけガイド	○○○
アフリカ音楽	○	コラム	○○
ポップ音楽と現代アート	○	写真プロジェクト	○
カブレット	○○○	アートロック、ワーク	○○
カブレット・ソング	○	映画祭	○○
歌とダンス	○	展覧会	○
バレエ、ダンス	○○○○○	博物館	○

表10 インタビュー記事に取り上げられた人の肩書 (色部分は複数回取り上げられた例)

オペラ歌手	歴史家
女優・俳優	デュオ (ミュージカル/カブレット)
歌手	広告代理店ディレクター
ピアニスト	舞台監督 (演劇)
オペラ監督	リコーダー奏者
指揮者	振付師
主催者 (マネジャー)	コメディアン
レビューライター	ヒップホップ・アーティスト
スタンドアップコメディ	パフォーマンス・グループ
ミュージシャン/劇作家	翻訳家 (歌詞専門)
伴奏ピアニスト (声楽専門)	作曲家
美術館設立準備者	作曲家/ミュージシャン
作家/女優	作家
ヴァイオリニスト	アクロバット
フリーユージェルホルン/トランペット奏者	歌手 (元政治家)
デュオ (ピアノと声楽)	映画監督
音楽監督/作曲家	サウンドトラック作曲家
哲学者/弁護士/作家/コラムニスト	ジャズバイオリニスト
	音楽ビジネス (退職)
	大学教授 (ミュージカル分野)

較するといった楽しみにもつながるだろう。

#### ⑥個人の生き方や考え方に焦点をあてた記事

最後の記事群は、個人の生き方や考え方に焦点をあてるもので、主としてインタビュー (56本) と追悼記事 (16本) から成り、いずれもアートに関わる多様な肩書の人に取り上げられている。インタビューで取り上げられた人物 [表10] には、複数の分野で活動している人の

ほか、「アートの世界から去る人」や「別の分野からアートに転身して来た人」も登場している。アート分野における生き方の多様性や、アートとの関わり方はその人ごとにある、ということが記事において可視化されている。また、仕事で高く評価されていても家族との時間が十分に取れず、今後は仕事をセーブする、という指揮者の話など、キャリアやライフワークバランスについての問いかけもされている。

#### (4) 考察

以上、日刊新聞 **Trouw** における芸術の取り上げ方を分析した結果、記事の切り口における多彩さが浮き彫りになった。具体的には、芸術が新聞で扱われる際の記事の掲載数やボリューム、内容や視点の多様さからも、「芸術は公に語るべきものである」ことが可視化されている。また、多様な人々を登場させ、それぞれの視点を示すことで「アートへの見方は多様である」ことが示されている。様々な見方や人々の生き方を掲載することで、「その人の見方は公に示す価値があるのだ」というエンパワメント機能を、また、記事をきっかけとして、例えば「このことについて確かに考えさせられる」「他の人の意見も聞いてみたい」と思わせるなど、読者にも様々な反応や新たなコミュニケーションを生じさせる刺激にもなるだろう。その意味では、文化記事は、アイデアややり取りが生まれるフォーラムの機能を果たしているといえるのではないか。

そして、このような記事の質を担保しているのが、ジャーナリストの専門性である。ジェネラリストではなく、各ジャンルで鍛えられた専門家が集められており、それぞれの視点から判断できるジャーナリストの独立性と専門性が、ひいては記事の多様性を支える重要な要因となっている。さらに、取材方法や記事の形態をテーマに合わせて調整し、ビジュアル（写真）も添えて魅力的に伝えようとする工夫もみられる。

芸術は日刊紙で毎日取り上げられるトピックであり、そこで取り上げられるのは、決して「特別な人達」なのではない。コロナ禍という社会危機の中にあっても、人々は芸術に日常的に触れ、芸術を通して生き、語り、考えているのである。記事分析を通し、そのような芸術文

化に関する記事のあり方を読み取ることができた。

#### 謝辞

本研究は、JSPS 科研費 20K03136 の助成を受けたものです。

#### 註釈

- 1) 「『奢侈』を全面抑制 質實の国民生活再建」、大阪毎日新聞、昭和 15 年 8 月 18 日
- 2) 畑正夫「産業工芸とクラフト」1985 年、p.108
- 3) 前掲 2)、p.108
- 4) 亀ヶ谷雅彦「自粛現象の社会心理」、学習院大学大学院政治学研究科政治学論集 (6)、46-96、1993 年
- 5) 「『大喪の礼』などに関する対応についての申し入れ」京都府会だより No.173、1989 年 3 月号、1989 年 2 月 20 日
- 6) 佐藤岳史・志賀英仁「災害のたび増える『自粛』検索ワードが語る不謹慎狩り」朝日新聞デジタル、2017 年 3 月 9 日、  
<https://www.asahi.com/articles/ASK383281K38UEHF003.html> [最終確認日：2022 年 10 月 31 日]
- 7) 「お祭りや選挙活動……“自粛”はいつまでするべき？」IT メディアビジネスオンライン、2011 年 4 月 15 日、  
<https://www.itmedia.co.jp/makoto/articles/1104/15/news051.html> [最終確認日：2022 年 10 月 31 日]
- 8) 増田貴司「『不要不急』を軽視するな」、日本経済新聞夕刊、2020 年 9 月 4 日  
<https://www.nikkei.com/article/DGKKZO63435010U0A900C2ENI000/> [最終確認日：2022 年 10 月 31 日]
- 9) 古内博行「新自由主義社会のテクノロジーと格差社会」千葉大学経済研究第 28 巻 3 号、2013 年 12 月  
[https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900117331/09127216\\_28-3\\_101.pdf](https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900117331/09127216_28-3_101.pdf) [最終確認日：2022 年 10 月 31 日]
- 10) 田島麻衣子参議院議員による「『不要不急の外出・移動』の定義と解釈に関する質問主意書」に対する菅義偉内閣総理大臣（当時）の首相答弁、第 204 回国会（常会）、2021 年 2 月 5

- 日  
<https://www.sangiin.go.jp/japanese/joho1/kousei/syuisyo/204/touh/t204008.htm> [最終確認日：2022年10月31日]
- 11) 大阪における文化芸術関係者への新型コロナウイルスの影響に関する実態調査（調査主体：おおさか創造千島財団、協力：大阪アーツカウンシル）、自由記述編における分析による。  
[https://www.chishimatochi.info/found/wp/wp-content/uploads/2020/06/osakaartsurvey2020\\_fdf.pdf](https://www.chishimatochi.info/found/wp/wp-content/uploads/2020/06/osakaartsurvey2020_fdf.pdf)
- 12) 筆者が大阪アーツカウンシル委員（2020年度）を務め、事業視察を行ったコンサート会場での体験による。当事者名の特定を避けるため、個別のコンサートの名称等は挙げないこととする。
- 13) 宮城聰「【特集：コロナと演劇】宮城聰ロングインタビューー東京芸術祭ワールドコンペティションにむけて（3）演劇は「不要不急」か?」、web ゲンロン、2020年10月16日  
[https://www.genron-alpha.com/article20201016\\_01/](https://www.genron-alpha.com/article20201016_01/) [最終確認日：2022年10月31日]
- 14) 「『#STAY HOME に音楽を』アーティストらの演奏動画配信」、産経新聞、2021年5月12日、  
<https://www.sankei.com/life/news/210512/lif2105120052-n1.html> [最終確認日：2022年10月31日]
- 15) 齊藤希史子「鈴木雅明 ロマンチックな選曲セイジ・オザワ松本フェスで指揮」、毎日新聞、2021年6月22日  
<https://mainichi.jp/articles/20210622/dde/012/040/003000c> [最終確認日：2022年10月31日]
- 16) モニカ・グリュッターズ「民主主義には人工呼吸が必要、なぜ芸術が危機の時代に不可欠なのか」、(初出は“Demokratie braucht Beatmung—Warum Kunst gerade in der Krise unverzichtbar ist”, ターゲスシュピーゲル紙、2020年5月9日付)  
<https://www.goethe.de/ins/jp/ja/kul/sup/202/21930923.html> [最終確認日：2022年10月31日]
- 17) 河合温美・藤野一夫訳「芸術支援は最優先事項。ドイツ・メルケル首相が語った『コロナと文化』」、美術手帖、2020年5月16日  
<https://bijutsutecho.com/magazine/news/headline/21933> [最終確認日：2022年10月31日]
- 18) 「新型コロナ禍 文化の担う役割とは」日本経済新聞、2020年4月24日  
<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO58412300T20C20A4AA1P00/> [最終確認日：2022年10月31日]
- 19) 久知邦「文化芸術は『不要不急』か 早稲田大教授・藤井慎太郎さん」西日本新聞、2020年6月16日  
<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/617245/> [最終確認日：2022年10月31日]
- 20) 竹下郁子「新型コロナ「イベント中止なら倒産」「政府は補償を」の声続々と」Business Insider Japan、2020年2月27日  
<https://www.businessinsider.jp/post-208449> [最終確認日：2022年10月31日]
- 21) 「コロナ危機と文化 灯を消さない支援は国の責任」しんぶん赤旗電子版、2020年4月5日  
[https://www.jcp.or.jp/akahata/aik\\_20/2020-04-05/2020040502\\_01\\_1.html](https://www.jcp.or.jp/akahata/aik_20/2020-04-05/2020040502_01_1.html) [最終確認日：2022年10月31日]
- 22) 塩田彩「努力は報われる?『自助幻想』の勘違い 退陣する菅政権の一年」毎日新聞、2021年9月21日  
<https://mainichi.jp/articles/20210920/k00/00m/010/181000c> [最終確認日：2022年10月31日]
- 23) 「文化は不要不急なのか?～コロナ禍で憲法25条が問いかける～」NHK 首都圏ナビ、2021年5月12日  
<https://www.nhk.or.jp/shutoken/wr/20210512a.html> [最終確認日：2022年10月31日]
- 24) 「文化は単なる娯楽か 見取り図なき支援策からの脱却を：不要不急とよばれて コロナ時代の芸術（5）」日本経済新聞、2021年4月9日  
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOFG19C1U0Z10C21A3000000/> [最終確認日：2022年10月31日]
- 25) 「戸倉俊一文化庁長官に聞く」読売新聞、2021年5月19日
- 26) 原康浩「文化芸術は実力主義か?文化芸術は不要不急か?」2021年5月22日  
[https://note.com/hara\\_yasuhiro/n/n9926fff165d4](https://note.com/hara_yasuhiro/n/n9926fff165d4) [最終確認日：2022年10月31日]
- 27) 大阪における文化芸術関係者への新型コロナ

- ウイルスの影響に関する実態調査（調査主体：おおさか創造千島財団、協力：大阪アーツカウンシル）、自由記述編における分析による。
- [https://www.chishimatochi.info/found/wp-content/uploads/2020/06/osakaartssurvey2020\\_fd.pdf](https://www.chishimatochi.info/found/wp-content/uploads/2020/06/osakaartssurvey2020_fd.pdf)
- 28) 前掲 27)、オンライン配信についての意見による。また、ポップスのジャンルからも同様の声が多数聞かれた。一例として以下のものがある。姫路まさのり「アジカン後藤『生演奏派の僕が「音楽アプリはもっと普及すべき」と思う理由』」PRESIDENT Online、2021年1月5日  
<https://president.jp/articles/-/41810> [最終確認日：2022年10月31日]
- 29) デイビッド・スロスビー「文化経済学入門：創造性の探究から都市再生まで」日本経済新聞社、2002年
- 30) アーツカウンシル統括責任者（当時）中西美穂氏の言葉による。
- 31) Nic Newman et al, Reuters Institute Digital News Report 2021, 23rd June 2021, p.9  
[https://reutersinstitute.politics.ox.ac.uk/sites/default/files/2021-06/Digital\\_News\\_Report\\_2021\\_FINAL.pdf](https://reutersinstitute.politics.ox.ac.uk/sites/default/files/2021-06/Digital_News_Report_2021_FINAL.pdf) [最終確認日：2022年10月31日]
- 32) World Health Organization, Novel Coronavirus (2019-nCoV) Situation Report-13, 2nd February 2020, p.2  
<https://www.who.int/docs/default-source/coronaviruse/situation-reports/20200202-sitrep-13-ncov-v3.pdf> [最終確認日：2022年10月31日]
- 33) 青木喜美子「メディアの権力監視 日本は最低評価」、『放送研究と調査』、NHK放送文化研究所、2019年8月号  
[https://www.nhk.or.jp/bunken/research/focus/20190801\\_5.html](https://www.nhk.or.jp/bunken/research/focus/20190801_5.html) [最終確認日：2022年10月31日]
- 34) 二関辰郎「フィルターバブルの進行する中で－情報の多様性確保と主体性の回復」、骨董通り法律事務所 for the arts、2021年7月30日  
<https://www.kottolaw.com/column/210730.html> [最終確認日：2022年10月31日]
- 35) 中村督「ジャーナリズムは資本主義とどのようにして折り合いをつけるのか『言論と経営－戦後フランス社会における「知識人の雑誌－』（名古屋大学出版会）」All Reviews、2021年4月30日  
<https://allreviews.jp/review/5472> [最終確認日：2022年10月31日]
- 36) 飯島伸彦「民主主義の情報インフラストラクチャー」、名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究、第4号、2006年1月  
<http://id.nii.ac.jp/1124/00000138/> [最終確認日：2022年10月31日]
- 37) 近藤誠司「COVID-19 インフォデミックの諸相」『社会安全学研究』（11）、85-95、2020年、関西大学社会安全学部  
[https://www.kansai-u.ac.jp/Fc\\_ss/center/study/pdf/bulletin011\\_1.pdf](https://www.kansai-u.ac.jp/Fc_ss/center/study/pdf/bulletin011_1.pdf) [最終確認日：2022年10月31日]
- 38) オランダ中央統計局（CBS）の2022年10月30日時点のデータによる。  
<https://www.cbs.nl/nl-nl/visualisaties/dashboard-bevolking/bevolkingsteller> [最終確認日：2022年10月30日]
- 39) 前掲 31)、p.89
- 40) Cees van der Laan, Het vertrouwen in traditionele media is groter dan we denken, Trouw, 2021年5月29日、  
<https://www.trouw.nl/opinie/het-vertrouwen-in-traditionele-media-is-groter-dan-we-denken-b797d667/> [最終確認日：2022年10月30日]
- 41) 前掲 31)、p.10
- 42) Over ons, Trouw, 2019年6月5日  
<https://www.trouw.nl/achter-de-schermen/over-ons-b7aea298/> [最終確認日：2022年10月30日]
- 43) Frederike Huijgen, Bart van der Linden, 75 Jaar Trouw-Trouw aan de waarheid?, Beeld & Geluid,  
<https://www.beeldengeluid.nl/verhalen/75-jaar-trouw-trouw-aan-de-waarheid> [最終確認日：2022年10月30日]
- 44) Trouw-nieuws, verdieping en gids, Trouw, 2005年8月18日  
<https://www.trouw.nl/nieuws/trouw-nieuws-verdieping-en-gids-bba-22715/> [最終確認日：2022年10月30日]
- 45) Cees van der Laan, Hoe alle toetsen van de Trouw-piano de melodie van kwaliteitsjournalistiek maken, Trouw, 2020年9月26日、



<https://www.trouw.nl/opinie/hoer-alle-toetsen-van-de-trouw-piano-de-melodie-van->

kwaliteitsjournalistiek-maken-baba9690/ [最終確認日：2022年10月30日]